

見逃さないで 褥瘡悪化のタイミング

東京慈恵会医科大学医学部看護学科
皮膚排泄ケア認定看護師 室岡 陽子

1. 皮膚の構造と生理機能

皮膚は皮膚の表面から表皮、真皮、皮下組織、筋肉と分かれており、さらに表皮は皮膚膜、角質層、顆粒層、有棘層、基底層に分かれている。特に角質層は水分の喪失防止や保湿機能といった皮膚をバリアするという大切な機能を司っている。

皮膚のバリア機能が正常に機能している場合は、外からのアレルゲンや微生物などから皮膚を守ることができるが、バリア機能が低下した状態、いわゆる乾燥肌になるとその機能は破綻し、刺激物が侵入しやすくなる。バリア機能が低下した皮膚表面は、従来皮膚の機能としてあるアルカリ中和能が低下し皮膚を弱酸性に保てなくなるため、湿疹やかぶれなどを起こしやすくなる（図1）。

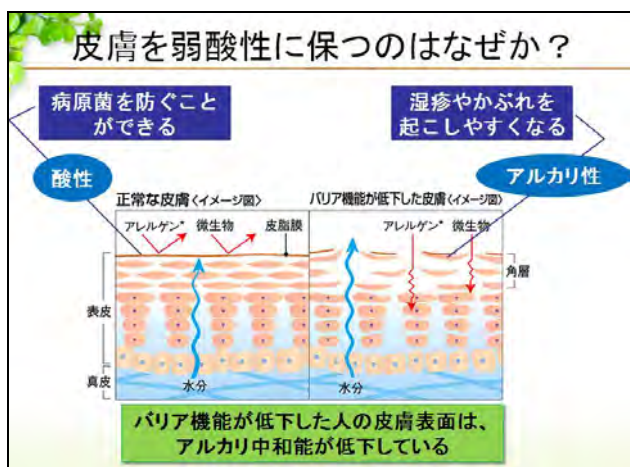


図1 正常な皮膚とバリア機能が低下した皮膚

2. 褥瘡の分類

褥瘡は発症直後から約1～3週間程度、局所病態が不安定で発生要因によって複雑に推移する急性期褥瘡とそれ以降局所病態が比較的安定している慢性期褥瘡に分類される。急性期褥瘡は発赤、紫斑、水泡、びらんなどの症状から始まり皮膚の損傷は浅いため治癒しやすい。しかし皮膚の損傷が深くなると治癒に時間がかかり慢性期褥瘡に移行しやすくなる（図2）。

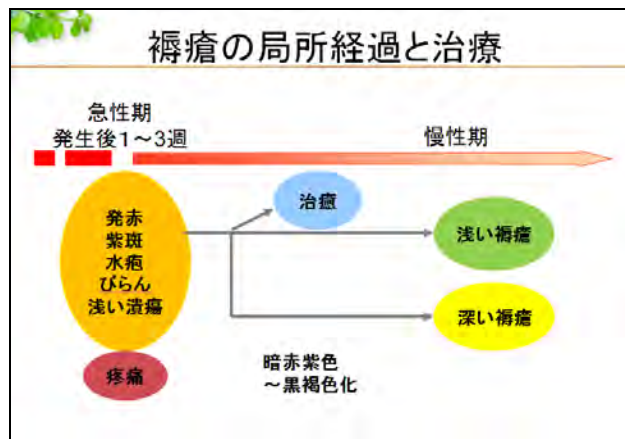


図2 褥瘡の局所経過と治療

3. 褥瘡の予防方法

①持続する発赤の見方

褥瘡はいきなり皮膚に傷ができるわけではなく、圧迫やずれにより皮膚の阻血状態が生じることにより皮膚が赤くなるという現象から起こることが多い。しかし一時的に微小血管が拡張して皮膚が赤くなることもあるため、褥瘡との区別が必要である。区別の仕方としては、皮膚を圧迫した際、赤みがひかない場合は褥瘡、白く皮膚が変化する場合は褥瘡ではないと判断する。またこの発赤は、突出した骨と一致した部位であるかどうか判断のポイントになる。しかし、やせている場合には皮膚だけが移動し骨の突出した部位からずれていることもある。これが皮膚のずれであり、ずれをおこしている部位は褥瘡が発生しやすい部位であり、かつ褥瘡が発生した場合、治癒しにくい部位でもあるため観察が必要である。

②皮膚炎の予防

褥瘡は一般的な皮膚病から発展することも稀ではない。カンジダ皮膚炎などは身体の抵抗力が落ちている状態において、股から臀部、股のくびれた部分の皺の深いところなどに赤みが生じ発生する。カンジダ皮膚炎は湿度の高いカビの一種なので、きれいに患部を洗い水気をよく拭き取ることが大切である。これを放置したままにすることによって皮膚は浸軟

というふやけた状態となり、皮膚のバリア機能がさらに破綻し、そこに圧迫やずれなどが加わることによって褥瘡発生へとつながる。

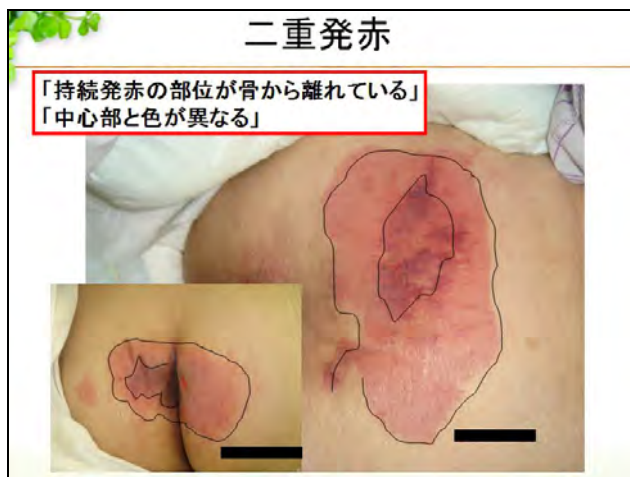
③スキンケア方法

日頃から皮膚の観察をしておくことはもとより、おむつは適宜交換し、排泄物が常に付着しているような状態にならないよう清潔を保つことが大切である。また皮膚を排泄物の刺激から守るために、皮膚の乾燥を予防するために市販の保湿剤などを塗布し、皮膚を弱酸性に保つことが大切である。

4. 褥瘡悪化のサイン

①二重発赤

褥瘡は皮膚の発赤（赤み）から始まるというように、発赤をみつけた場合、その部位の除圧に努める必要がある。しかし、それがいつのまにか中心部分が紫色に変色してくるような状態（図3）発見したら要注意である。この場合、骨の突出している部位と一致しない場合が多く、その後深い褥瘡に変化することがある。そのため中心部分の紫色が濃くなり、皮膚が固くなるような場合には、処置が必要になるため、近医への受診を検討する必要がある。



②水泡

皮膚に摩擦やずれが加わると水泡を形成しやすくなる。特に踵はベッドのヘッドアップなどにより知らぬ間に皮膚のずれを起こしていることがある。水泡の中の滲出液が透明な場合は経過観察していてもよいが、変色し黒色になるようであれば、組織が壊死している状態である可能性が高いため処置が必要

になる。水泡をみつけた場合には、水泡を破らず踵の除圧を心がけることが大切である。

③創部感染

褥瘡ができてしまった場合、日々の処置の中で滲出液の量や色、臭いを確認していくことが大切である。その際、急に滲出液の量が多くなったり、腐敗臭のような臭いがするような場合にはかかりつけ医に相談することをおすすめする。褥瘡は無菌な傷ではなく、皮膚に存在する常在菌が付着している。しかし、それが褥瘡の治癒を遅らせたり、悪化させたりすることがあるため、経過に応じた処置が必要である。

5. おわりに

褥瘡予防は日々の除圧と皮膚の観察がとても大切である。特に生活習慣が変わったり、体調が変化したりした時にはさらに意識した予防行動が必要です。褥瘡ができた方は、皆さん「今までは大丈夫だった」と言われますが、体は日々変化しています。褥瘡が悪化することにより、制限された生活を余技なくされることのないように、早期発見、早期対応を心がけてください。

